

西日本豪雨被災地でボランティア

「微力が集まり大きな力に」



「二人の力は小さいけれど、微力が集まれば大きな力になる」。力強く語る石川雄也さん(経営2)は昨年の西日本豪雨で被害に見舞われた岡山県倉敷市真備町にボランティアとして赴いた。

きっかけはリーダーシップ開発プログラム(キャリアデザインセンター主催)だった。プログラムでは社会人とチーム活動を行うが、そこで知り

合った人が西日本豪雨ボランティアに参加していたことに刺激を受けた。同じプログラムを受講していた鹿間いぶきさん(商2)や、武藤悠平さん(商2)、自身の幼なじみの4人で現地へ赴いたのは昨年9月15日。ボランティア団体が運営するテント村を拠点に、2日間、作業に携わった。

石川さんにとっては初

は、今年2月にも真備町を訪れた。今度は、活動を報告したSNSを見るなどした専大生8人を含む、計10人のチーム。5日間滞在し、家屋の復旧に当たった。鹿間さんは「現地に行ったことで、見えてくるものや、感じるものがある。それが2回目のボランティアにつ

なだった」と語る。担当した店舗兼住宅は、発生から7カ月が過ぎても被災直後のままだ。10人は床や階段の泥を落として、消毒液を塗布。作業前は靴が必要だった室内が、寝転べるまでにきれいになった。「ボランティアという堅苦しいイメージがある

が、作業中はなごやか。家主の方と一緒に食事をしたり、被災時の話を聞いたりして関係も深まった。まずは自分が充実していることが大事だと思う」と石川さん。

ボランティアは1人で決めた。実際には4人で参加し、2回目は10人に増えた。参加できないけれど、支援したいというメッセージももらった。

前、石川さんは、実家がある静岡県富士市内に募金箱を設置、多くの善意が寄せられた。「だれかを助けたという思いがみんなに伝わったことが何よりうれしい。これからも、自分のやりたいことを行動に移し、多くの人に伝えていきたい」。石川さんは笑顔で話した。

私は留学生として2年間、専修大学で勉強してきました。今回、セミナーの行き先が偶然、母国のベトナムだったので申し込みました。

ベトナムでは都会に行きたことがあまりなかった。

ベトナムのレストラで取りまとめをするケンさん(中央)

行きの飛行機で、日本人学生は多分、ベトナムという国はどんな国なんだろうと想像したでしょう。私もそうでした。私はしばらく帰国していませんでした。自分の国がどんなふうに見えるのか、想像しました。

ベトナムに到着し、空港にUSSHの先生方や学生さんが迎えに来てくれて、温かい気持ちにな

りました。道沿いの建物や景色を見て、とても懐かしく感じました。

毎日、みんなというところに行くので楽しかったです。しかし、楽しいことばかりではなく、天気の変遷で体調を崩したり、レストラで日本語が通じ



室内の泥を落とした後、消毒液を塗布するボランティア学生=2月22日、岡山県倉敷市

佐竹教養ゼミ『文明を歩く』

佐竹弘靖教養ゼミ『文明を歩く』は、ユーラシアやアメリカ大陸の国々の文化や風土、生活、宗教、民族について、文化人類学、比較文明学やスポーツ人類学など幅広い視点から研究する。最終課題として数週間のフィールドワークを実施し、現地の日本語を学ぶ大学生と交流、考えや価値判断などを学ぶ。昨年度はトルコを訪ねた。参加した岡田夢奈さん(文4)に体験記を寄せてもらった。(学年は現在)



アンカラ大学の学生とキャンパスの前で



2月18日から25日までトルコに行ってきました。ゼミ生4人が参加、みんなで考え、さまざまなことを体験した8日間でした。

トルコ訪問体験記

岡田夢奈(文4)

日本文化への関心の高さ実感

まず首都アンカラで、アンカラ大学の日本語を学ぶ学生たちと交流しました。私たちの日本についてのプレゼンテーションでは、教室の椅子が足りなくなるほどたくさんの方が集まりました。発表後も積極的な質問があり、学生たちの日本語のレベルや日本文化に対する関心の高さを感じました。

午後のレクリエーションでは、ラップや尺八を披露し、お返しに伝統楽器ウードの演奏がありました。また、日本のお菓

子や折り紙、日本の昔遊びなどを体験してもらいました。

その夜、私たち4人それぞれがアンカラ大学の学生にホームステイしました。私はアンカラ郊外に住む同い年の学生宅にお邪魔しました。ファミリーは私のホームステイを楽しみにしていて、ヨグルトをソースにしたトルコ料理マントゥを用意していました。日本とトルコのチャイの飲み比べ、トルココーヒーの作り方や飲み終わった後にする占いのやり方、トル

コの伝統やジョークなどを教えてもらい、ホームステイでなければ体験できない多くのことを知りました。翌朝はとも別れ難かったです。

今回の旅行では、アンカラ、ブルサ、イスタンブールの3都市を訪ねました。どの街でもモスクの塔ミナレットがありました。私の旅行の目的の一つは、モスクをたくさん見て回ること、良い経験となりました。特にブルーモスクと呼ばれるスルタンアフメト・ジャミーやスレイマニエ・ジャミーは荘厳で、たくさんの方が訪れます。現在まで続く信仰の場が残っていることは、胸に迫るものがありました。

USSHでの3日間の語学研修の初日は発音やあいさつなどを学び、先生が一人一人の発音を聞き分けて細かく指導してくれました。私にはどうしても苦手な音がありました。その時、先生が「日本人はこの音が不得意よね。練習すればできるようになるわ」と笑顔で言ったことが印象に残っています。

ホームステイ先では、パートナーの母親がアオザイを着てUSSHのミン学長からプログラムの修了証を受け取る加藤さん(左)

参加する前は、ただベトナム語を学ぶ10日間だと考えていました。しかし参加した後は、学んだもの・得たものは語学だけではないとハッキリ言えます。霊廟や博物館を訪れ、ホーチミン元首相の偉大さを確認したり、花を運ぶ自転車を見てベトナムの気候を考えたり、トイレの使い方の違いを感じたり。日本の良さを再認識し、また、ベトナムの良さを日本に取り入れたいと思うことがあり、視野が広がったと実感しています。

うれしい贈り物

加藤夏衣(文2)

えは花模様を想像しますが、いただいたものは飛び回る龍。見ているだけでにぎやかな様子が伝わってくるので、とても気に入っています。振り返ると、これが一番心に

残っています。



アオザイを着てUSSHのミン学長からプログラムの修了証を受け取る加藤さん(左)